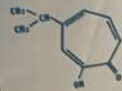


時代の先へ—エプタ Vol.99
φεγγάρι 2021



←PTA

太古から続く潮流の軌跡

特集
黒潮

いまだに... 煮出して... 茶葉の量を調整して... 常温でもそれぞれの味が楽しめる。

独特の風味や



今からおおよそ二千年前のこと。徳島・阿波から黒潮に乗って房総半島に上陸し、房総・安房を興した阿波忌部(族)と呼ばれる人々がいた。そんな話は日本史の授業でも聞いた記憶がない、と首を傾げる人がいても当然だ。

「阿波忌部の房総開拓はいつ、歴史に埋もれていて長い間、表に出てこなかったのです」

こう話すのは、

「忌部文化研究所」会長の林博章さんだ。

地元阿波の歴史に着眼した林さんの忌部研究は、古代日本史研究の第一人者の故・上田正昭氏(京都大学名誉教授・東アジア学会会長)が「新忌部研究」として画期的」と評価、推薦してくれた。

以後、林さんは約二十年間、徳島県内はもとより日本各地や海外も巡り、阿波の古代史を解明すべく研究活動を続けてきた。

「その結果、重要なキーワードの一つが阿波忌部だと確信したのです」

阿波忌部とはいったいどんな人々なのか、そしてなぜ、どのように安房を開拓したのだろうか。



黒潮と阿波忌部の東国の開拓

天皇即位に欠かせない阿波忌部の役目

古代において、阿波忌部氏は徳島県、吉野川流域一帯を中心に勢力を誇った一族だった。一族といっても血族ではなく、さまざまな技能を持った人が集まった職業集団だった。

「阿波忌部は、麻、穀(穂)、粟、養蚕、製紙、農業、織物、鍛冶などの殖産興業をはじめ音楽・芸能などにも携わる産業技術集団であるばかりでなく、造船や航海術の知識や経験を持つ海洋民の一面もありました」

他に類を見ない技術・経験を持った阿波忌部は、大和朝廷の祭祀において重要な役割を担っていた。その一つが新天皇の即位の儀式に欠かすことのできない麻の織物、鹿服の調達である。

「即位の際、天皇は大嘗祭の中心的儀式・大嘗宮の儀。において大嘗宮に設けられた悠紀殿と主基殿で一晩過ごされます。その神座に備えられるのが鹿服です。これだけは古来、

赤齊多呂

麻を植えるところから織りあげるまで阿波忌部が統括しているのです」

今もこの重責を担い続けているのが、阿波忌部直系の三木家。鹿服を作製し、宮中に直接届けられる唯一の家だ。三木家は二〇一九年十一月に行われた新天皇の即位式、大嘗宮の儀でも鹿服の調進を果たした。

黒潮に乗って房総へ

「古代、祭祀はもちろん、日常においても衣服や紐などの材料として、麻は生活に欠かせないものでした」

阿波忌部は、その麻などの栽培地開拓を目的に海路を東へと向かう。

出航地は現在の鳴門市大麻山の麓、旧吉野川の河口付近。阿波忌部の船の司を務めた天富命は、阿波忌部の祖神・天日鷲命の孫であった由布津主命(阿八和氣比古)を開拓団の隊長に任命、船団を率いて船出した。

船団は出発した後、和歌山市の紀ノ川下流域に到達、紀伊半島沿いを熊野灘まで進むと黒潮に乗り、伊豆半島南部付近を通過して房総半島へ

「天岩戸神話の天照大神」(春斎年昌画 1887年)

阿波忌部は天日鷲命(あめのひわしのみこと)を祖神とし、『日本書紀』や『古語拾遺』に登場。天照大神が天岩戸に入られたとき、この神が絃楽器を奏でると弦の先に吉祥を表す鷲が止まったと伝えられている。

と進み、ついに黒潮の北限、千葉県館山市の布良に到着した。

船団は大規模だったため、一度に上陸することはできず、半分は洲崎半島に上陸した(洲崎神社の口伝)。

もちろん、航海の様子が記された文献が残っているわけではない。根拠は今も残っている地名・遺構・系図・伝承ですと、林さん。

「今も吉野川の風物詩となる川船は『カンドリ船』と呼ばれますが、カンドリは船団の呼称だったと考えられます。紀ノ川下流、紀伊半島・太地町南東端の岬、館山市楯取など、

一般社団法人・忌部文化研究所
画像提供(P40~P43)



航行したと思われるルート上に。カンドリ。という地名が複数見られるんです。また、メロム和歌山県田辺市、海草郡下津町、伊豆半島最南端の南伊豆町の三カ所にあります」

さらに、大船団での渡航に先駆けて先遣隊を派遣したのではないかと話す。

「館山市の安房神社境内のある忌部塚には、井戸の開鑿中に発見された弥生時代のものとと思われる二十二体の人骨が葬られています。地元ではこれを阿波忌部のものと仮託し、安房神社では現在



令和の大嘗祭(2019年11月)で、大札の準備に勤む巫女さん(右)と、「他服」の調達の大役を果たす阿波忌部の直系の三木信夫さん(写真左中央に立つ人)。写真右下は阿波忌部が織った木綿(ゆう)の原料たる「穀(カズ)」の織補束。



でも毎年七月に忌部塚へ行われています」
開東一円へと広がった東国開拓
肥沃な土壌を持つ南房総は、阿波忌部が望んだ地まさしく



阿波忌部の全国進出(3世紀~4世紀と推定)

忌部氏の祖神・天太玉命の孫で崇神天皇の子、天富命は、天皇の命を受け安房への移住計画を立て、忌部一族を率いて東遷し(3~4世紀に推定)、関東地方でも勢力を広げた。



承安伝家の阿波忌部(館山市「安房神社」)。

だった。阿波から持ってきた麻を植えるとしてもよく育った。
「そこでこの地を、総の国」と名付けたのです。麻の繊維は固いですが、使っていると房のように柔らかくなることから古代、麻のことを総と呼んでいました」(古語拾遺 参照)。
阿波忌部の主要文化である総(麻)を地名としたことから、そこが豊穡の地だったことがうかがえる。
阿波忌部が房総にもたらしたのは麻だけではない。米・粟をはじめとする穀物の栽培法、鉄器製作、禽獣を避ける方法など、さまざまな技術を伝授した。

房総開拓の次の仕事は勝浦の各所に技術集団を配置することだった。その一つ、木材を掌る。御木忌部は名木に置かれ、細殿に飯宮を建てた。「細殿には吉野家が伝承を語り継いでおられます。また、勝浦の名は、



良「布良崎神社」では、現在でも放鳥の阿波に感謝を捧げている。上陸した阿波忌部である勝占忌部須々立命に由来します(遠見神社より)。

そしてさらに、浦賀水道から東京湾、上総国、下総国、武蔵国、下野国へと東国開拓は続く。「関東一円に根付くお西様(西の市)」

も、浅草の鷺神社はじめ、阿波忌部の祖神・天日鷹命が祀られることが多く、それは東国開拓伝説が起源の一つになっているのです」
スーパーリエイター
誕生の秘密

阿波忌部は関東以外に讃岐、河内、大和、紀伊、石見、出雲、伊勢、三河、遠江、伊豆などに進出し、各地の風土に見合った技術を定着させた。いわばさまざまな業種のスペシャリストがそろったスーパーリエイター集団だったということができる。なぜ、それほどの知識・技術を持ちえたのか。その秘密は剣山系にある。

標高552mの三木山の頂上部にある阿波忌部の末裔・三木家。徳島県最古の1650年頃に建築。屋敷前の広場は今上天皇の大嘗祭に「斎庭」になった。





古来、阿波忌部が暮らした剣山の「ソタ世界」。

上は針葉樹林帯から、下は照葉樹林帯まで植生が多彩で、薬草とその調査の知識も豊富だったという。「この地の地質、結晶片岩は加工しやすく、石積みに向いていたのです。それで、その技術も自然と上達した。挙げればきりがありませんが、山の恵みを最大限に利用して、ソラ世界の人々は暮らしのエキスパートになっていったのです。実際、今でも八十代のおじいちゃんの中には、農業や石積みだけでなく、薬草や建築など全ての知識を持っている人がいます。阿波忌部とは、長老のもと

ソラの民は急傾斜地の特性を生かし、世界でも例を見ない・持続可能な農耕を営んできた。



と林さんは言う。標高一九五メートル、西日本第二の高峰、剣山は、徳島県のシンボルの存在だ。「阿波忌部の祖先は、もともとは剣山系の山上の集落に住む山の民でした。剣山系に広がる高地性傾斜地集落を私は「ソラ世界」と呼んでいるのですが、そこは農作物や生活資源を得るためのあらゆる条件がそろっていました。気候変動で米が全滅しても、焼き畑で育てた雑穀で食いつながることができ。高地で育つ木の丈夫な繊維で上質の紙や布をつくることができます」



つるぎ町・一字明谷の石垣。民家基盤の高度な反りを持つ高石垣だ。



剣山の山頂近くにある「宝蔵石神社」。巨大な岩がご神体の宝蔵石。

「中央忌部との関係を指摘される遺跡は五・六世紀後半のもので鳴門市大麻町の「萩原2・1号墓」よりも二百年ほど新しいです。忌部関連の古墳群や伝承地



藍の館展示室。江戸期、日本を席巻した阿波藍の始まりは阿波忌部の麻織物の染色だったとされる。



国指定重要文化財「太布(たふ)」を織る様子。太布は阿波忌部の古代織物木綿(ゆう)だったと考えられる。

みなく伝え歩いた阿波忌部。しかし、奈良時代ごろから共に神事・祭祀に携わってきた中央豪族、中臣氏に押され、中央忌部も含めて次第に冷遇されるようになる。こうして歴史の表舞台から姿を消した阿波忌部だが、「彼らを語らずし

て日本の黒潮文化の解明はできないと思います」と、林さんは話す。

忌部氏の研究が始まって二十年。剣山系の世界農業遺産については徳島大学が注目し、支援者も集まりだして本格的な研究はまだこれからと、林さんの顔は明るい。今後、どんなことが明らかに becoming くるのか楽しみでならない。

林博章

忌部文化研究所 会長

昭和30年(1955年)徳島市生まれ。青山学院大学法学部卒。二〇〇五年、鳴門教育大学大学院地理学修士課程修了。県立高校社会科教師。二〇一二年から徳島大学非常勤講師も務める。環境問題の根本的な解決法と併せて歴史的研究を続けている。著書「日本各地を巡る阿波忌部の足跡」(安房神社)「日本の建国と阿波忌部」(麻植部)の二冊とともに「徳島県史」阿波忌部「オオゲツヒメと徳島創生」日本の穀物起源神の原像「剣山系の世界農業・文化遺産」がある。



徳島県美馬市、剣山から東に連なる県下第4位の高峰・一の森(標高1,879m)から眺めた剣山系の峰々と明日。

も存在しません。また、「延喜式」神名帳で「忌部」を冠する神社は阿波国のみであること、忌部の祖神・太玉命は阿波より阿波忌部によって「安房神社」や各地に運ばれていることからみれば、中央から阿波の図式は成立せず、阿波忌部が中央忌部になったと考えることができます」

さらに、さまざまな史料を読み解くと、阿波忌部の一派は大和国造(国を治めた豪族)、伊勢国造にもなったことがうかがえる。全国各地へ進出し、征服するのではなく持てる知識・技術を惜し

保管方法

日光の当たらない、風通しの良いところで保管してください。香りが少なくなってきたら新聞紙の芯を天日干しをしてください。香りがもどります。検品を重ねておりますが、まれに髪のようなものが入っている場合がございます。